知事：　皆さん、どうもありがとうございました。聞かせていただくだけで大変勉強になりました。それぞれ非常に、大変特徴のあるといいますか、他の模範となられる取り組みをしておられるなと思わさせていただきました。

私も神田小学校の校区のすぐそばで育ったので、あの地域は地形的にも熟知しているつもりですけど。鴨部も神田もそうですけど、要するに、いわばベッドタウン的になっていて、ものすごく住民の数が多い。マンションなどもたくさんあって、そういうところで、防災という形でまとまりを持っていくのはいろいろご苦労があられるんじゃないかと思うんですが、例えば、特にマンションの方々とかとの連携というのはどういうふうに取っていかれるのかを教えていただければ。

Ａさん：　マンションの住民の方とは、防災に限らず、地域コミュニティの育成から見ても大きな課題ではないかと思います。セキュリティが非常に発達していますから、そういう点で大きな課題です。そういった状況の中で、ちょうど私たちの町内会連合会の役員に、マンションの管理者の立場にある者がいましたので連携していますが、防災訓練には直接は参加していただいていないので、その参加の仕組みづくりは１つの課題です。

知事：　ありがとうございます。この（事業者の方との）防災協定書は画期的ですね。素晴らしいと思いました。

Ｂさんや Hさんが、やっぱり夢を持って楽しくやっていくことが重要だと、いろいろと催し物と連携してやっていくということをおっしゃられまして、ほんとにそのとおりだなと思いました。それから、資金力を持っていくために産業振興と連携した取り組みをやっていこうというお話もほんとにそのとおりだなと思います。いろんな他のことをやっていく中で、防災も一緒にやっていこうということですね。自主防災組織を広めていくうえにおいてもものすごく重要な視点なのだろうなと思いました。楽しくやっていく催しとの連携とか、特に産業振興との連携とか、どういう例やアイデアを持っておられるか、もしあったら教えていただければと思います。

Ｂさん：　組織の発足が、実は地域の親父会がベースになっています。小学校の子供会で小学校を卒業した子を持つ親父たち、お母さんもそうなんですが、せっかくのグループがこのままなくなるのはもったいないということで、親父会というのを発足させたんですよ。現在、自主防災組織のメンバーもその親父会の人間が結構多いです。だから、いろんな集まりがある中で、Ｈさんが言われてましたけども、終わった後飲み会をすることがよくあります。その親父の中には料理する人間がいるので、このまま炊き出しの訓練をしようかといったそんなノリで今後やって

いきたいという計画は立てております。

それと、先ほど言われました産業振興ですが、実際考えたことがありまして、総務省で ICT 使った地域産業制度、産業振興の補助金制度がありますが、例えばグーグルマップ上に被災状況をマッピングして、それを情報端末で情報を共有するというシステムづくりをちょっと考えて、実際安くできるんですけども、ただ、産業振興と結びつかない。あと、有事の場合には防災への取り組み、平時の場合は例えば、今春野のグリーンはるので地域で取れたものの販売とかをやっていますが、そういうところとうまく連携して、ネット上で地場の農産物を売って、それによって資金稼ぎをするといったことも考えています。

しかし、この前の再仕分けでこの制度が駄目になるということを聞きました。具体的にまだ計画は立ててはないですが、そんないろいろな形でいろんな人たちと知恵を出し合って、今後も活動したいと考えております。

知事：　やっぱり飲み会は基本ですよね。グーグル上の被災情報とか、確かにそうですね。

Ｃさんのお話で、防災マップを学生さんたちと一緒に作っていかれるということですが、１個１個手作りで、実のあるものができるだろうなと思いました。防災マップを作る時、例えばその地形の把握とか高度がどうかとか、難しいところもあると思いますが、作っていかれる中でのご苦労みたいなことがありましたら、今後の参考にさせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

Ｃさん：　当然、個人情報があります。それから、だんだん過疎化になり、子どもさんが県外で働いている方が数多くいらっしゃいます。その方たちの連絡先やかかりつけの病院。あと、どの部屋で休んでいるかといった一番の基本をマップに載せたかったんです。

あと、チェーンソーを使える人や消防士、看護師、医者といった人たちを防災マップに列記しておこうかと。ただ、消防士、看護師、医者の人たちはいざという時は人助けに出て地域の活動は難しいとは思いますが。

今は高校生に手伝ってもらっていますが、中学生、小学生の高学年とも一緒に防災マップづくりができないかなという意味で５年計画で、現在進行中です。

知事：　誰にどういう技術があるかってことをよく把握をしていくと。災害の時はこの人はどういうことをすることになるであろうと、そういうことですね。

私は子どものころから宇佐へよく泳ぎに行っていました。ウルメとかで、最近まちおこしされたりとか非常に熱心にやっておられ、海を生かしていくことを盛んにしておられて素晴らしいと思います。本当に海に近いところですから、津波のことは大変ですよね。先ほど、私も、津波避難タワーを造り始めるということを申し上

げたところですが、我々も勉強させていただこうと思っています。

危機管理部長は土木行政を長くしており、県内の地形を熟知しております。東洋町から西にかけて、ここだったらこう逃げられる、ここへ行ったら逃げられるということを調べて、その中で新たにタワーを造っていこうとしています。例えば、ビルに外付け階段を付けて逃げるようにしようというところもありますし、ビルもないところは、津波避難タワーを造ろうということで進めています。

その時に２つの条件があって、地域の皆様方で避難計画ができているとそれが生きてきますので、そこがまずできているかどうかということです。できてないところはぜひ作っていただくように我々も後押しをさせていただきます。もう１つは適当な土地がすぐ確保できるかというところです。この２点が１つの課題というか、条件になります。今回両方揃っていたところが４カ所あり、予算を議会にあげて造っていくようにしているところです。ほんとにとにかく命が守れないといけない。何といってもまずは命だと思います。だから、そこを守れるように今後避難タワーの整備を進めてまいります。

さきほどのお話の中で私が思ったのは、津波避難訓練をやっておられて、高齢者の方や保育園児が速やかにすぐ避難できるのかということだと思います。普段であれば、これだったら大丈夫だろうと思ったら、訓練してみて、ここが実は課題だったと新たに発見されたところもたくさんあるのではないかと思うんですけど、例として教えていただければと思うのですが。

Ｄさん：　いかに子どもさんを早く速やかに避難させるかということがネックになりますが、宇佐はほんとに目の前が海です。高知大の先生の話では、マグニチュード７以上になると第１波が来るのが 13 分ということです。なので、いかに早く高齢者などの弱者を高台へ運ぶかということを念頭に置いてやっています。宇佐はあまり土地がないので、土佐市が力を入れているのは防災公園です。幸いなことに、宇佐小学校と給水塔という少し小高い山がありますので、そこへ向いて公園を造っていただき、津波になった場合はそこへ逃げる。

それから、土佐市塚地から入ってくるトンネルを抜けたところの土地が空いているので、そこへも公園を設置したらどうかという案もあり、土佐市の協力を仰いでやっていきたいと思っております。

知事：　我々も今後力を入れて、土佐市さんとも協力させていただきながら、やっていきます。

Ｅさんの調査は素晴らしいですね。（地盤が）上がるとされているところでも、落ちているところもあったりする。こういうことを知ってて対策を練るということが重要だと、ほんとにおっしゃるとおりだと思います。こういうお知恵、ぜひ今後我々

も対策練っていくうえで使わせていただきたいと思います。

Ｅさん：　お願いがありますが、宇佐町に検潮器、潮位器を設置していただけないかと思います。

理由は、実は昭和南海地震が起きる前日の午後 5 時ごろから急激に宇佐の港は潮が引き出して、通常時の干潮線よりもまだマイナス２ｍ以上引いております。これが、4 時 19 分の地震が起きるまでずっと続いております。つまり、この 11 時間の間、港は干し上がった状態になっています。実は、このように潮が引いた異常干潮となったところが、僕の調査の範囲内でわかってるところだけで徳島県を含めて、高知県沿岸部に 15 カ所あるんです。この退潮現象を起こしたところの原因は地盤が隆起したのでないかと思っております。その退潮現象を事前にキャッチすることができたら、次回の南海地震は直前予知ができるんじゃないかと思います。安政の資料なんかにも、同じようなことが起こっているという記述もありますし、甲浦なんかでも同じように地盤沈下による押し波が来たという東洋町史などの記録もあります。このことが次も起こるという確率は極めて高いと思っています。だから潮がどれくらい引いたかということが分かれば、昭和南海地震の時には 11 時間の余裕がありましたので、その間逃げる時間があると思います。

知事：　分かりました。ちょっと検討します。

最初に、地盤が上がったのかもしれませんね。海底地震計とか、海底のその地形の動きを GPS で詳細に把握する装置とか、事前にいろいろ予測するための装置がいくつかあります。超大震動の地震波をどう把握していくかとか、いろんなことがあるんですが、高知県は今、日本でも地震の関係では最高の先生方とお付き合いをさせていただいています。科学的な知見というのをため込んでいって、それを防災に生かそうという取り組みを進めさせていただいています。今Ｅさんおっしゃったことも、歴史の経験に基づいて、実際に起こったことですからね。そういうのを把握しての対策を練っていくことを、組み合わせてやっていかないといけないと思います。

Ｆさんの地域では、自主防災会と自治会と２つの組織、これを同一にして組織をしておられるということですね。もともとどういうきっかけでそういう形を取られようと思われ始めたんですか。

Ｆさん：　形のうえでは、自主防災会とまちづくり自治会は別々の組織として活動しております。

自主防災会にはほとんどその活動資金というものがないので、自治会の方でもある程度協力をしながらやっていくという形を取らなければ、活動が十分できな

いのが現状です。香南市の補助金が現在年間２万円です。それを活動ができるように倍以上に上げてもらって、防災資機材も１つ２つと増やしていけれるようにならなければ、全員参加型の活動に結びつかないということも言えると思います。資金があって、目に見えた活動がずっと続いていけば、住民の方も一生懸命やりゆうからみんなが力合わせてやらないかんと思えるように、環境づくり、雰囲気づくりをしていくことが運営の大きな要になっていくのではないかと思っております。現に、まちづくり自治会がかなり活発に活動していますので、自治会と自主防災会とは表裏一体の組織であるというような感じでいきたいと思います。

知事：　香宗川のお話もいただいておりましたが、土木事務所の方で現地確認させていただき、対応を検討させていただきます。

Ｆさん：　ぜひお願いします。我々の地域が壊滅的な津波の被害を受ける可能性が非常に高いので、県もぜひ 23 年度にはやってもらえるように、２年、３年計画ででもやってもらえれば町の環境自体もものすごく変わってきます。香宗川の草が生えている所へ空き缶や廃棄物を捨てていることも見られます。環境整備をすることによって住民の意識も変えていくという部分でも、香宗川のしゅんせつを急いでお願いしたいです。

知事：　担当課に言っておきます。
　Ｇさんのお話にありました夜間にする避難訓練は、あえて一番厳しい条件でやろうということでされているのだと思うんですが、昼間と比べて、夜間でやったからこそ分かったことがありましたら教えていただければと思いますが、いかがですか。

Ｇさん：　昼間の訓練は香南市全体の訓練で、夜間の避難訓練は弁天地区だけで独自でやっています。やはり地震はいつ起こるか分かりません。飯時かも分からんし、夜中かも分からん。それで、大体 11 月にやっていますが、どうして 11 月になったかというと、夏場はなかなか暗くならないので、11 月ごろだと午後 5 時ごろになったら暗くなり、早めに訓練もできるから、飯時とかも外せるということでやっています。しかし、実際にやっているのは午後 7 時頃になるので、全員参加はなかなか難しいです。1 回目は 1 軒で 1 名ぐらい必ず出てくださいということで、45 名ぐらいでした。その時は、各人に何時からやるということを周知徹底していましたので非常に早かったです。予定よりすぐ集まって、これはあんまり訓練にならないなぁと。今年はそういう反省もあって、時間は周知徹底して、サイレンを鳴らして、それからマイクで皆呼びかけしますので、隣近所皆に声をかけ合って、行ける行けんを確認しもって来てくださいということを各班長さんにお願いして、

今年は声かけを中心に行いました。前回は投光器を昼間に準備して、夜になったらすぐつけれるようにしていましたが、今回は全部真っ黒にして、倉庫から投光器、発動機持っていって、実際にどれくらいかかるかということをやりました。やはり声かけしながら行くと、前回よりは時間がかかりました。

知事：　そうですよね。例えば、投光器や発動機を運ばないかんとなって、いざという時、それがほんとにあるかどうか分からない。道によっては避難の途中の道が暗くて分からないとか、橋のありかがわからないとかそんなことがありますものね。どこにあるか把握しておかなければならない、それはそうですね。

どこで寝ているかを全員に提出してもらったというお話ですが、これは皆さん協力的にやっていただけましたか。何かご苦労がありましたか。

Ｇさん：　うちの場合、昔からの町で、１区～５区といっても 10 軒単位で１区・２区になっていて、一番多くても 20 軒で、みんなが知り合いですから言ってくれました。例えば、うちは娘が東京にいるが、たま帰ってきてここで寝るということを間取りを書いてもらったり。それを分散したらいきませんので、私が全部保管してます。

知事：　やっぱり信頼関係ですね。日ごろの人間関係といいますか。

Ｇさん：　ええ、やっぱり昔からの町ですから。個人情報と言われますが、うちの場合はあんまりそういう苦労はなかったみたいです。

知事：　Ｈさんのお話の司牡丹で飲み会というのも楽しそうでいいですね。

他の自主防災組織の立ち上げのお手伝いをしておられるというお話ですが、詳しく教えていただけませんか。中本町さんの方から声かけをしていかれるわけですか。実際、19 年度は 5.7%だった組織率が、今 55.4%まで増えたと相当効果があるようですが、これは他の地域にもぜひ広めていきたいという感じもしていますが、いかがでしょうか。

Ｈさん：　社会福祉協議会と連携して、福祉も防災も兼ねて、みんなで一緒にやったらどうかと。とにかくみんなが寄って集まっていい町にしよう、できることは皆でやろうということでしています。

中本町の方は佐川町のなかでは早いうちに立ち上げて、内容的にもまあまあ濃い活動ができていたと思うのですが、その中で社会福祉協議会の方と知り合って、そこから、こういう地域が立ち上げをしたいという声があがってるよと聞きまし

た。そこで、僕らがやったことを参考に立ち上げていただいたらいいかなと、中本町のメンバー何人かが行って、地図の作り方や組織の作り方といったことの話をさせていただいて、今５地区、それから仁淀川地区でも昨年度は７地区ぐらいそういった活動をやらせていただきました。

Ｉさん：　補足させていただきますけど、中本町という私たちの地区は非常にうまい具合にできています。僕は民生委員をやっていて、それから部落長さんが１人おいでて、その部落長さんが長いことやってくれているため、比較的地域としても信頼関係がある中で、この防災を立ち上げようという話になりました。お年寄りがどこで寝てるといった情報を僕が持っていたので、それを社協と共有して自主防災組織を作り、部落長さんは各地区の班長さんを把握して、それから防災組織は防災組織の委員を別に作ってという組織づくりを上手にやったのでうまく連携ができたと思うんです。すごく良かったのが、先ほど資金の問題の話もありましたが、防災組織を運営していくにはやっぱりお金も要るわけです。各部落の総会が年１回各地区であり、そこで提案して、防災の方に１人あたり 500 円ぐらい出してくれないかという話を持ち上げましたら、全員賛同してくれました。微々たるお金かもわかりませんけど、そういうお金を出していただくことによって意識を高めてもらおうと。みんなが参加してるという意識づけをすることも大事じゃないだろうかという思いをしています。

　そういう形で私たちの地区は非常に上手にいっているため、行政からも一緒に行って話をしてくれと言われることがありますが、どことも立ち上げるのがかなり大変みたいですね。今日お越しの方は非常にうまくいってる地域ばかりで、立ち上げるにはどうやって立ち上げたのかなとか、そこを少し聞きたいと思いました。立ち上げて、それからあと継続していくというのはどんなに大変かと。佐川町は防災の意識が非常に薄いところで、津波も何にもないし、前回の南海大震災もそんなに被害のないところでしたので、意識が薄いところの中で何をするかというのはやはり地域づくり、地域のコミュニティを作っていくということを中心に一生懸命動いている状態です。それを他の地域にお話に行くということをしております。役場の方や社会福祉協議会が協力してくれるんで動きやすいです。バックボーンがちゃんとしてくれたら動きやすいなとつくづく思って、今動いているところです。

知事：　そういったネットワークを使ってやっておられるわけですか。

　ラジオの話ですけども、AM が聞こえないこと自体問題だと思いますが、最低限として、大規模な災害情報というのは AM で流れてない時は FM で同じのも流すそうです。FM は聞こえていますね。大規模な災害情報については FM でもあるということ

をお伝えさせていただきたいと思います。あと NHK さんにも今お話になられたことをお伝えしておきたいと思います。AM は大規模に電波を流すと、どうしても入らないところが出てくるので、そういう時に、FM でピンポイントに流すという組み合わせで、行き渡らせるそうです。

Ｊさん：　神田町内会連合会防災会の者です。会長から先ほどお話がありましたが、防災訓練をする時は必ず８時から、河川敷には缶やいろんな物が落ちているので、それをきれいに溝さらいして、その後消防の方においでていただき、地震時の訓練をしています。11 時 50 分ぐらいからすいとんを作るのですが、各町内会から出てきていただいたお母さん方に簡単にできるすいとんの作り方を教えて、130 人～150 人分を作っております。

そして、地域の方が寄付してくれた 30kg のお米を国からの補助で買ったお釜で炊き上げて、おむすびを 150 個ほど作って、すいとんと一緒に提供しております。今年度は自衛隊の方においでていただき、炊事班の方が牽引車で 100 人からのお釜を持って来てくだいました。そういうふうにいろんなことを会長が案を出してくださいます。

神田町内会連合会では環境づくりから防災を始めているということを知っておいていただければと思います。

Ｅさん：　国の方で連動型は宝永クラスの地震に腹を固めたと聞いたが、宝永クラスの地震が起きると、とてつもない津波が起きます。宇佐では 13m、一部で 16m、宇佐の青龍寺では 25mという津波の記録がございます。これに対応するぐらいのハードというのはまず不可能だと考えます。とにかく逃げるしかないと知事が言われたように、逃げる場所を造っていただく。避難タワーのことで、さっき土地の問題点を指摘されましたが、土地がない場合には、私はこの道を挟んで造ったらどうかと考えております。徳島県からずっと避難タワーを見てきましたが、低いという不安があります。その宝永クラスの津波に対応するということになれば、今造っている避難タワーではどうも低いんじゃないかと。避難タワーのステージの高さに私たちは命を預けるわけでございますので、そのことがちょっと引っかかってまいります。県はどうでしょうか。

知事：　連動型に向けて国は腹を固めたわけですが、連動型に向けて腹を固めるべしと強く訴えたのは高知県でありますから、我々はその連動型ということも想定しての対応を進めていくことで、腹を固めていますし、そうでないといけないと思っています。

連動型になると日本列島の関東以南あちこちで災害が起こります。すると、例え

ば自衛隊の救援にしても、それを前提にした救援体制というのを作ってもらわないといけないわけです。国の広域的な調整のあり方にものすごく影響してきます。だから、そこを国の方でもしてもらわないといけないということで訴えてきました。今訓練もだんだんそういう連動型をにらんだ訓練というのを始めるようになってきましたので、私たちもまずそういうことに対応していくつもりであるというのがまず第１です。

もう１つ、25mもの津波ということになると、とてつもないことになってきます。逃げるということが一番の対応策になるのは間違いないと思うんですが、その時土地がない場合どうするかということです。土地がないからいいということにはならないので、その場合は何とか探すということだと思います。さっきおっしゃった防災公園を造ってそこにといった方法や、何らかの公共施設をうまく使ってということもあると思います。そうでない場合についても、それならどうするかということを知恵を練って、結果として避難場所ができるというふうにしないといけないと思ってます。道の上ということができるのかどうかはちょっと分かりませんけれども、いろんな知恵を練って何らかのことは考えていきます。

危機管理部長：　例えば、道路の上空占用をうまくして、道路上に歩道橋があるみたいな形では検討は可能だと思いますし、その河川にある橋梁を２段にするとかいうようなアイデアもあるようです。とにかく逃げる場所を確保するということが非常に重要になると思いますので、いろんなことを検討していきたいと思います。

Ｅさん：　種崎で避難タワーが造られて、あれは 2 億 4,000 万ぐらいかかってると思いますけども、あんな立派なものじゃなくても、例えば半分にして同じアングルだけでもいいので、身近なところへ造っていくということを考えいただきたいと思います。

知事：　種崎は国のモデル事業で造ったものです。種崎は、１回浦戸湾の方に寄せて来る時に来て、戻る時にもう１回覆っていくという、二重に来る、ものすごく大変なところなので、日本でも恐らく最高品質の津波タワーです。高知市の中で一番あの建物が丈夫じゃないかと言われるぐらいの建物を造っています。場所によってはそこまででなくてもという場合もある思います。とにかく逃げる場所があることが重要で、数ができるだけ早く揃っていくことが重要だと思ってますので、逃げられるということをまず確保するという目的を第一にして設置を進めたいと思ってます。

Ｃさん：　災害の起こった事後の救援等のことですが、赤岡の自衛隊を、私たちは救援し

ていただくのに一番頼りにするんですが、高速道路が駄目になる。国道がだめになる。そうすると、どこの自衛隊が我々を助けに来て、３日以内に救援物資が運ばれるか。それと、淡路大震災のように 6,000 人もの死者が出た場合に後の処置、亡くなった人たちの処置をどうするか、それから私が一番心配するのは仮設トイレです。テレビで放映してもにおいは伝わってきません。

そういう事後の対策というのはどういうふうにお考えでしょうか。

知事：　県で、応急対策活動計画を今作っていて、これは県庁各組織が災害が起こった後、いろんな方々とご協力させていただきながらどういうことをやっていくかという手順を定めていくものです。Ｃさんのご指摘のとおりだと思いますし、私も常々部局にも話をしているんですが、災害が起こった時にやること、例えば救急のあり方なんかについても、通常でやってることと根本的に対応、考え方を変えないといけないと思います。

災害でけがした人を、例えば医療センターまでいかに早く運ぶかというのがポイントになってきます。来年の３月からは救急ヘリを１機導入して、これからヘリ２機体制で県内救急医療に対応する予定です。ただ、これはけがをされた方の数が少ない平時の対応です。そうじゃなくて、災害の時にはその医療機関の方をいかに前方展開させるかということの方が非常に重要になってくると思っています。

道路を使った搬送ができなければ、海をうまく生かしていかないといけません。

この間、奈半利で防災訓練をした時も、海からの上陸を意識して訓練しました。海上での運搬力どう確保するかを考えると、自衛隊や海上保安庁そして地域の漁船の皆さんとの連携をうまくどうやってやれるかというのも非常に大きなテーマになってくると思います。

それと連動型という時には、自衛隊も全国各地に行かないといけなくなってくると思います。その時に高知県に来てくれる自衛隊の部隊は、実はもう決まっています。この方々をどうやって運ぶかとなると、基本的に強力な運搬能力を持った海からというのが非常に大きなポイントになると思います。そういうことから、我々の自主防災訓練では、今年も去年もそうでしたが、自衛隊の「おおすみ」という大きいタイプの輸送艦に必ず参加してもらい、海からの運搬というのを意識した訓練を一生懸命実施させていただいております。

いずれにしましても、私たちが常に考えておりますのは通常運ぶことによって対応できるというのとは全く発想を変えて、何事につけ大規模に物事が起こる、その圧倒的な物量に対してどう対応するかということを意識して対応しています。遺体の問題、けが人の問題もそうです。この応急対策活動計画は、常にそういうことを意識した計画づくりということになっています。それを徹底して進めて、平時の対応では済まないということでやらせていただきたいと思います。

Ｋさん：　個々の命を守るということで、家が倒壊した場合、阪神・淡路大震災の時に必要な資機材は４つ。ハンマーとバールとのこぎりとジャッキやと。これをそれぞれの防災地区で意識して広げている地区はありますでしょうか。それは資機材倉庫だけでしょうか。

　家が倒壊した場合にその人がもし中で生きておれば出ていったりとか、即助けるという場合に、かなり数が要ると思うんです。そういうことをやっている地域ありますでしょうか。

Ｂさん：　我々の地区は８カ所の地区に分かれており、各８カ所に主要な資機材、特に先ほど言われた物は必ず常備するような、そのような分散型の設置ということを考えております。

Ｋさん：　ぜひ、私の地区でもそれをやりたいと思ってます。県もぜひ４つの最低限必要な、これは家庭に必要なので、ぜひ広報の方でお願いしたいと思います。

Ｌさん：　県のホームページで次回の地震についてはマグニチュード 8.4 の土佐市で波の高さが６ｍぐらいというのを見ました。昨日のNHKの特番で海岸ぶちの死者の70%が津波で亡くなるということを聞いて、宇佐は、津波からの災害になると思いますが、宇佐の堤防高さは大体5.5ｍぐらいで、その8.4のマグニチュードに対して堤防が機能して、十分波から守れるのか。堤防の耐震性というか、県のホームページに載っている8.4に耐え得るのか、お尋ねしたいと思います。

知事：　堤防は、着々と機能を向上させていかないといけません。ただ、堤防だけで完全に津波を防げるかというと、そういう堤防はなかなか難しいんだと思うんです。やっぱり減殺です。そのパワーをいかに落としていくかっていうことです。津波はご存じのとおり、越波してドーンと来るというだけじゃなく、水のかたまりがやってくるわけですよね。その時、下の部分だけでもとめておければ上の部分だけになって、その分水のエネルギーというのは大幅に減ります。そういうことで対応するということもあって全く役に立たないものではないと思いますが、他方で堤防そのものについていえば、それこそ国の大規模公共事業になってくる場合が大変多いです。公共事業の予算はだんだん減らされている中ではありますが、常に要所となるところの堤防整備は一生懸命進めようとしています。

　残念ながら、南海地震対応ほど強くない堤防しかないところがいくつかあり、そこの中で特に危険度の高いところから重点的に整備を進めようとしているところです。ただ自然災害ですから、絶対にこうすれば何が何でも大丈夫ということはできないと思うんです。

だから、来る前提のもとで、それからどうやって身を守るか、逃げるかという作戦の練り方をしておくということも非常に重要かと思い、避難タワーの話をさせていただいています。

自主防災組織の強化に向けて県ももっとというお話をさっきからいただいていますが、おっしゃるとおりだと思います。今、「みんなで備える防災総合補助金」というのがあります。これはもともと自主防災組織の育成、つくることについての補助金だったんですけど、やはりつくっただけじゃなくて中身の向上が重要じゃないかと、活動活性化事業というのをやり始めています。ここのところは不断に改善をしていかないといけないと思っています。先生方のお知恵や市町村の皆さんのご意見もいただいたりしながら、この活動活性化の補助メニューを少し追加していきたいと考えております。今日いただいたご意見も生かさせていただいて、より使い勝手が良くて、実態に合ったものにするようにという取り組みを進めさせていただきたいと思います。